

郡遺跡発掘調査概報

(株式会社孔官堂倉庫建設に伴う調査)

平成 5 年 3 月



茨木市教育委員会

はじめに

茨木市は、南北に長い地形をしており、豊かな自然を背景に、古代より多くの人々が歴史を刻み、生活の営みの痕跡である文化遺産が、数多く残されています。

文化遺産の中には、私たちには、直接見るできないものもあります。このような貴重な文化遺産の中には遺跡も含まれています。遺跡は、私たちの先人の活動の場であったものが、時代とともに土に埋もれ、山野、田畑あるいは宅地等に姿を変えながら長い年月保存されてきました。

しかし、近年にみる大規模開発は、今まで地下に眠っていた文化財の散逸を招くことになりました。そのため、茨木市教育委員会では、市内において毎年発掘調査を実施しております。発掘した遺跡の重要性を認識するため、遺跡の歴史的環境を復元し、後世の人達に伝えるとともに、市民の皆さまにとって、郷土を深く知る手掛かりとなり、郷土愛のさらなる醸成に寄与することになりますならば、幸いに存じます。

最後になりましたが、本調査を実施するにあたりまして、ご協力いただきました関係の皆さまに感謝いたします。

平成5年3月

茨木市教育委員会

教育長 村山 和 一

例 言

1. 本書は、平成4年度に株式会社孔官堂より調査の依頼により、茨木市教育委員会が調査を実施した発掘調査の概報である。
2. 調査は、茨木市教育委員会社会教育部社会教育課宮脇薫を担当者として実施した。
3. 調査資料の整理は、茨木市立文化財資料館において行った。
4. 調査においては、株式会社孔官堂、川西建設株式会社、株式会社田中組の協力を得た。
5. 写真測量を実施にあたっては、アジア航測株式会社の協力を得た。

目 次

はじめに

例 言

第1章	位 置 と 環 境	(1) ~ (3)
第2章	調 査 に 至 る 経 過	(4) ~ (5)
第3章	調 査 の 結 果	(6) ~ (12)
第4章	お わ り に	(13)

挿 図 目 次

第1図	周 辺 の 遺 跡 分 布 図	(2)
第2図	調 査 地 の 位 置 図	(5)

図 版 目 次

図版1	1 期 調 査 全 景
図版2	1 期 調 査 の 北
図版3	1 期 調 査 の 南
図版4	2 期 調 査 の 全 景
図版5	2 期 調 査 の 北
図版6	2 期 調 査 の 南
図版7	遺 構 配 置 図

第1章 位置と環境

郡遺跡は、大阪府茨木市上郡、郡、存H、畑田、上穂積に所在する弥生時代から中世までの複合遺跡である。

千里丘陵の北東端の麓から老ノ坂山地を源する勝尾寺川と茨木川に合流し、南に流れていた茨木川が東に蛇行している右岸の間に立地している。

この地域は、高速自動車道中央道西宮線が東西に横断しており、また中央部近くに茨木インタ・チェンジがあり、それから派生するかのようの国道171号線、府道高槻・京都線が放射状に通っており交通の要衝の地となっている。そのような交通の利点から付近一帯は、住宅地の中に倉庫や工場が混在している。また、一部農地を見ることができる。

郡遺跡の隣接地域には、畑田遺跡、中河原遺跡があり、これら遺跡相互間の有機的関連についても考える必要がある。

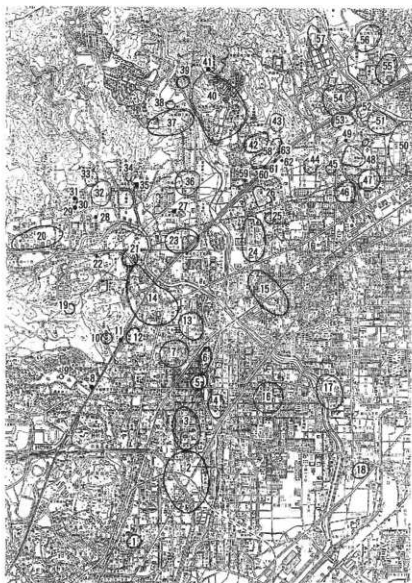
この付近の人間の最初の足跡は、郡遺跡の北に広がる老ノ坂山地の山麓に見ることができ、これから派生している洪積台地の茨木市宿久庄、安威、太田からはナイフ形石器、石核、剥片等出土している。今回の調査地の近くの上穂積においても尖頭器が発見されている。

周辺地域における縄文時代の遺跡は、茨木川の対岸に位置している洪積台地に立地している耳原遺跡において、後期から晩期の深鉢を棺として使った甕棺によって形成された墓域の一面が確認されている。

弥生時代の遺跡には、耳原遺跡、畑田遺跡、春日遺跡、中河原遺跡があり、調査はいつれの遺跡においても、部分的にしか行われていないが、耳原遺跡は弥生時代前期には集落が営なまれており、他の遺跡においても中期前半、集落が営なまれていたことがわかっている。

古墳時代の、北の老ノ坂山地の山麓には、紫金山古墳、南塚古墳、海北塚古墳、耳原古墳、新屋古墳群、安威古墳群がある。また、西の千里丘陵の山麓においても見付山古墳、上寺山古墳がある。

郡遺跡の西に隣接して穂積庵寺がある。数回の調査によって、瓦などが出土しており飛鳥時代に下ると考えられる古代寺跡である。



- | | | | | |
|------------|----------|------------|-----------|-----------|
| 1 常楽寺跡 | 2 東奈良遺跡 | 3 中条小学校遺跡 | 4 新庄遺跡 | 5 駅前遺跡 |
| 6 上中条遺跡 | 7 信賢遺跡 | 8 上寺山古墳 | 9 松沢池池庭遺跡 | 10 弁天山遺跡 |
| 11 見付山古墳 | 12 穂積廃寺 | 13 春日遺跡 | 14 郡遺跡 | 15 経持寺遺跡 |
| 16 牟礼遺跡 | 17 溝作遺跡 | 18 日垣遺跡 | 19 地蔵池南遺跡 | 20 宿久庄遺跡 |
| 21 中河原遺跡 | 22 郡山古墳 | 23 耳原遺跡 | 24 太田遺跡 | 25 太田廃寺 |
| 26 太田茶臼山古墳 | 27 耳原古墳 | 28 海北塚古墳 | 29 南塚古墳 | 30 青松塚古墳 |
| 31 紫金山古墳 | 32 西福井遺跡 | 33 新屋神社古墳群 | 34 神龍寺古墳群 | 35 將軍塚古墳 |
| 36 安成遺跡 | 37 安成古墳群 | 38 長ヶ淵古墳群 | 39 桑原古墳群 | 40 塚原古墳群 |
| 41 阿武山古墳 | 42 上土室遺跡 | 43 新池遺跡 | 44 ツゲノ遺跡 | 45 氷室遺跡 |
| 46 宮田遺跡 | 47 郡家遺跡 | 48 今城塚古墳 | 49 狐塚古墳群 | 50 橋上郡衛遺跡 |
| 51 郡家本町遺跡 | 52 上牧遺跡 | 53 岡本山古墳群 | 54 弁天山古墳群 | 55 大蔵司遺跡 |
| 56 宮之川原遺跡 | 57 尼ヶ谷古墳 | 58 土室遺跡 | 59 石山古墳 | 60 二子山古墳 |
| 61 土保山古墳 | 62 石塚古墳 | 63 番山古墳 | | |

図1 周辺の遺跡分布図

郡遺跡の南端に位置している春日神社には、鎌倉時代（延慶二己辰年八月）の銘をもつ国指定の文化財の石燈籠もある。

郡遺跡の北には南海道（西国街道）が東西にはしり、また西には大阪街道が南北に縦断しており、遺跡の北西部近くにおいて交差している。付近一帯は、古代においても交通要衝地であった。郡遺跡の対岸の茨木川左岸の南海道の南の上野付近は続日本記にかかれている「植村駅」の推定地であり、東に隣接している耳原遺跡からその時代の集落跡も確認されている。付近の中河原遺跡、春日遺跡、倍賀遺跡においても奈良・平安時代から中世の集落が確認されている。

奈良時代の郡付近は地名などから摂津国嶋下郡の郡衙の推定地とされている。

第2章 調査に至る経過

株式会社孔官堂（代表取締役 増田久弥）から茨木市に、茨木市畑田町148番地の倉庫建築に伴う事前協議が行われ、同時に教育委員会社会教育課に埋蔵文化財についての協議があった。

それに対して、社会教育課は当地域一帯が弥生時代から中世までの郡遺跡内であることを回答した。

回答により、株式会社孔官堂より教育委員会に対して埋蔵文化財を確認するため、試掘調査の依頼があった。

社会教育課は、平成3年8月2日に試掘調査を実施した。試掘の結果、現地表下1.40mの盛土・耕土及び床土の下層に弥生式土器・土師器・須恵器を含む包含層が確認された。また、柱穴らしき遺構も検出された。

今回計画されている倉庫建設に対して発掘調査が必要であると孔官堂に対して回答を行った。

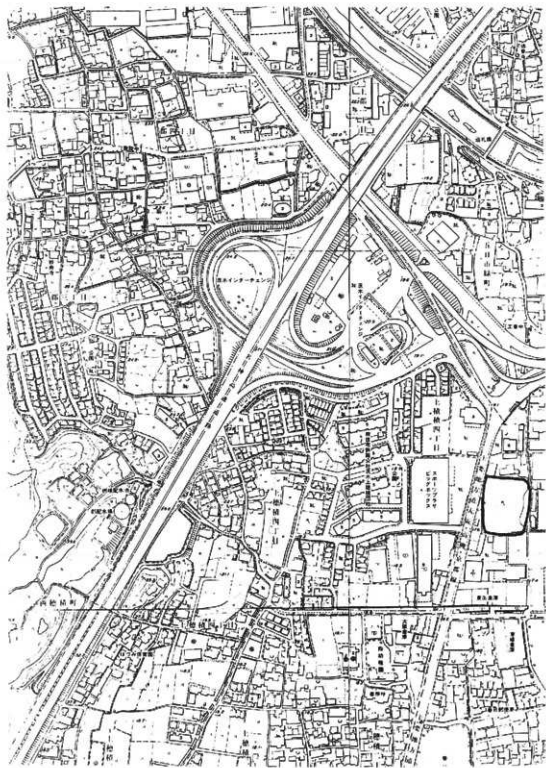
それに対して、株式会社孔官堂から教育委員会に対して平成3年8月26日に発掘調査の依頼があった。

株式会社孔官堂の事業者代理人である川西建設株式会社（代表取締役 川西保雄）と教育委員会との間で、発掘調査に関する契約を行った。

平成3年11月20日から平成4年1月18日まで発掘調査を実施した。

調査は、倉庫建設により埋蔵文化財に支障が生じる範囲において行った。調査は用地の関係もあり1期調査、2期調査に分けて行った。

整理作業は、茨木市立文化財資料館において、平成4年4月1日から平成5年1月31日まで行った。



第2図 調査地の位置図

第3章 調査の結果

方形周溝墓

調査地域の北西端において、平面がL字形に呈する溝が検出された。後世の削平によって台状部が失われて溝部分のみを検出した。

検出面は、周溝の幅が65cm～74cm、深さが16cm～23cmを測り、底面はほぼ平坦である。規模としては、短辺が3m65cm以上、長辺が5m62cm以上の大きさである。

周溝内に褐色土が堆積しており、弥生時代中期中頃（幾内第3様式）の壺・甕片が出土した。

溝-1

調査地域の北辺のほぼ中央から東へ大きく蛇行して調査区外へという弓状を呈した状態で検出した。

幅が1m32cm～2m35cm、深さが32cm～85cmを測る。底において深まるところも見られる。

溝の堆積の状態は、上層は褐色土、下層は淡茶色細砂層になっており、底の深まるところにおいては、厚く堆積している。出土された層からは、明確な差を認めることができない。上・下層からは6世紀中頃から7世紀前半の須恵器および土師器が出土した。

溝-2

調査地域の中央部を東西に横断する状態で検出した。幅が0.57cm～1.25cm、深さが32cm～47cmを測る。

溝内の堆積は褐色土の単一層であり、7世紀前～中頃の須恵器および土師器が出土している。

溝-3

調査地域の中央を東西から北東に横断するような状態で検出した。一部南西

端において途切れた状態で検出した。幅が1.40m～1.80m、深さは24cm～47cmを測る。溝内の上層は褐色土層、下層には暗褐色土層が堆積していた。出土遺物は、上層、下層の時期差がなく6世紀後半～7世紀中頃の須恵器、土師器が出土している。

溝-4

調査地域の北半において、北西から南東という状態で検出した。

幅が0.34m～0.84m、深さが11～18cmを測る。溝内の堆積は、褐色土の単一層堆積であり、6世紀前半から後半の須恵器が出土した。

溝-5

調査地域の南半において、方形に巡る状態で検出した。

幅が0.36m～42cm、深さは8cm～17cmを測る。溝内は淡褐色土の単一層堆積であり、古代末から中世への土師器、黒色土器、瓦器を出土した。

溝-6

一部途切れた状態で検出されたが、溝-5の北西から南西部を掘りなおした状態を呈している。

幅が、33cm～41cm、深さは7cm～14cmを測る。堆積土、出土遺物は、溝-6と変わりはない。

溝-7

調査地域の南半部において北西から東南へという状態で検出した。

幅が0.92m～1.21m、深さが44cm～62cmを測る。溝内には、小さい隙を含む暗褐色土が堆積している。弥生時代後期（畿内5様式）の弥生式土器が出土した。

土塊-1

調査地域のほぼ中央部において検出した。

短軸が1 m 58cm、長軸2 m 65cmのほぼ楕円形の平面をしており、深さは32cmを測る。底面はほぼ平坦である。出土遺物は、6世紀後半から7世紀中頃の須恵器と共に遺存状態は悪いが、動物の骨が出土した。

土塊-2

平面形は、楕円形を示し、短軸が1 m 16cm、長軸が1 m 86cm、深さは46cmを測る。

埋土は、暗褐色土であり、6世紀後半から7世紀中頃の須恵器を出土した。

土塊-3

平面形は、やや変形した楕円形を示し、短軸が1 m 15cm、長軸が2 m 17cm、深さは42cmを測る。

埋土は、暗褐色土であり、6世紀後半から7世紀中頃の須恵器を出土した。

土塊-4

土塊-3の南東に隣接した状態で検出した。

平面形は楕円形を示し、短軸が1 m 56cm、長軸95cm、深さは55cmを測る。埋土は、暗褐色土であり、6世紀後半から7世紀中頃の須恵器を出土した。

土塊-5

調査地域の北端部において検出された、全体の約半分を検出した。

平面形は径、2 m 15cmの半円形を示し、深さ1 m 45cmを測る。埋土は、上層は褐色土、下層は黒色土である。上層、下層から弥生時代中期（畿内3様式）の弥生式土器が出土した。

土塊の底は帯水層の淡黄色砂層であり、調査時においても湧水が認められたので、井戸の可能性はある。

土壇-6

平面形は、ほぼ楕円形を示し、短軸が1 m 75cm、長軸が1 m 96cm、深さ34cmを測る。淡褐色土が堆積しているが、出土遺物は出土しなかった。

土壇-7

平面形は、楕円形を示し、溝-3によって長軸の一部が削られた状態で検出された。短軸が1 m 38cm、長軸が2 m 65cm以上、深さは25cmを測る。淡褐色土が堆積しており、6世紀後半の須恵器が出土した。

土壇-8

平面形は、長辺が1 m 73cm、短辺が92cmの長方形を示し、深さは18cmを測る。底面は、ほぼ平坦であり、出土遺物は出土しなかった。

土壇-9

平面形は、長辺が1 m 4 cm、短辺が1 m 57cmの長方形を示し、深さ26cmを測る。

埋土は、淡褐色土であり、6世紀後半から7世紀中頃の須恵器を出土した。

土壇-10

平面形は、短軸が1 m 44cm、長軸が3 m 15cmのやや変形をした楕円形を示し、深さは47cm測る。底面は舟底状になっている。

埋土は、淡褐色土であり、6世紀後半から7世紀中頃の須恵器を出土した。

土壇-11

平面形は、短辺が92cm、長辺が1 m 92cm以上の長方形を示し、深さは21cm測る。

埋土は、淡褐色土であり、6世紀後半から7世紀中頃の須恵器を出土した。

掘立柱建物-1

調査地域の北東部で検出した総柱の桁行3間×梁間3間の建物跡である。桁行の柱間1m62cm、梁間の柱間は1m71cmを測る。

棟方向は、磁北より西に44度振っている。柱穴の堀形は、やや変形しているがほぼ方形を呈し、深さ35cm～52cmを測る。

堀形内には淡褐色土が堆積しており、6世紀後半から7世紀中頃の須恵器が出土した。

掘立柱建物-2

掘立柱建物-1の南東約8mに位置し、総柱の桁行3間×梁間3間の建物跡である。桁行の柱間は1m52cm、梁間の柱間は1m74cmを測る。

棟方向は、磁北より西に18度振っている。柱穴の堀形は、やや変形しているが、ほぼ方形を呈し、深さ35cm～52cmを測る。

堀形内には、淡褐色土が堆積しており、6世紀後半から7世紀中頃の須恵器が出土した。

掘立柱建物-3

掘立柱建物-2の南東約6mに位置し、総柱の桁行2間以上×梁間3間の建物跡である。桁行の柱間は1m62cm、梁間の柱間は1m70cmを測る。

棟方向は、磁北より西に16度振っている。柱穴の堀形は、やや変形しているが、ほぼ方形あるいは円形を呈し、深さ15cm～57cmを測る。

堀形内には、淡褐色土が堆積しており、6世紀後半から7世紀中頃の須恵器が出土した。

掘立柱建物-4

掘立柱建物-3の西南に約2mに位置し、調査地域の関係によって一部の柱穴に欠落がみられるが、桁行2間×梁間5間の建物跡である。桁行の柱間は1m68cm、梁間の柱間1m83cmを測る。

棟方向は、磁北より西に15度振っている。柱穴の堀形は、やや変形している

がほぼ方形あるいは円形を呈し、深さ12cm～42cmを測る。

堀形内には、淡褐色土が堆積しており、6世紀後半から7世紀中頃の須恵器が出土した。

掘立柱建物-5

調査地域の西南部において検出された。総柱の桁行1間以上×梁間2以上間の建物跡である。桁行の柱間は1m67cm、梁間の柱間は1m65cmを測る。

棟方向は、磁北より西に40度振っている。柱穴の堀形は、やや変形しているが、ほぼ方形あるいは円形を呈し、深さ17～44cmを測る。

堀形内には淡褐色土が堆積しており、6世紀後半から7世紀中頃の須恵器が出土した。

掘立柱建物-6

掘立柱建物-3の南東に約11mに位置し、調査地域の関係により、一部の柱穴の欠落がみられるが、桁行2間×梁間5間の建物跡である。桁行の柱間は1m81cm、梁間の柱間は1mを測る。

棟方向は、磁北より西に30度振っている。柱穴の堀形は、やや変形しているが、ほぼ方形あるいは円形を呈し、深さ21cm～47cmを測る。

堀形内には、淡褐色土が堆積しており、6世紀後半から7世紀中頃の須恵器が出土した。

掘立柱建物-7

調査地域の西南部において、また掘立柱建物-6の西南約3.5mの位置に検出された。総柱の桁行2間以上×梁間3以上間の建物跡である。桁行の柱間は1m82cm、梁間の柱間は2mを測る。

棟方向は、磁北より西に31度振っている。柱穴の堀形は、やや変形しているが、ほぼ方形あるいは円形を呈し、深さ16cm～41cmを測る。

堀形内には、淡褐色土が堆積しており、6世紀後半から7世紀中頃の須恵器が出土した。

建物として確認されたものは、7棟である。いずれの建物においても棟方向が西に約45度前後振っていることや、また柱の堀形から出土した土器が6世紀後半から7世紀中頃のものであり、掘立柱建物-1～-7が、同時期の可能性が高いと考えられる。

また溝-2も掘立柱建物の棟の方向とほぼ同一方向と考えられ、掘立柱建物1-4、掘立柱建物5-7とを区画する溝の役割をはたしていたと考えられる。

柱 穴

調査地域全域において検出された。

平面は、円形および方形に区別することができる。方形の柱穴は、一辺が50cm～80cm前後の比較的大きいものに限られている。円形の柱穴は、径が20cm～30cmの小さいものと、径が40cm前後の大きいものに別れる。出土遺物によって時期差を明確にすることはできない。

しかし、溝-5に囲まれた区画内には、平面が円形の径が20cm～30cmの柱穴が検出され、柱穴の堀形から溝-5同一時期を示す遺物が多くみられる。

第4章 おわりに

今回の発掘調査より検出された遺構は、大きく別けて、弥生時代、7世紀代、古代末から中世への三時期に別けることができる。

弥生時代の遺構は、方形周溝墓および溝-7であり、時期は異にするが弥生時代の集落を考えるための資料を提供することができた。弥生時代中期方形周溝墓が検出されたことにより、弥生時代の郡遺跡の墓域の一画を明らかにすることができた。

7世紀代の遺構としては、多くの柱穴を確認することができ、径が0.8m～1m前後の円形、一辺が0.8m～1mの方形の柱穴である。掘立柱建物として確認することができたのは7棟であり、いずれの建物も西に約15～30度軸が振れていることから、また柱穴の堀形内からの出土遺物も同じ時期と考えられることから、掘立柱建物-1～7の時期が同じ時期であると考えられる。掘立柱建物として確認できたものに、倉として考えられる総柱建物もあり、集落内における建物配置を考える資料が得られた。この付近一帯は、摂津国嶋下郡衙の推定地であり、また穂積氏の在郷地としても知られており、それらと考えられる集落との関連の意味をもつ調査でもあった。また、古墳時代から律令体制への過渡期をも表す建物でもある。

古代末から中世へ時期の遺構は、径が20cm～30cmの円形の柱穴で方形に巡る溝-5である。柱穴は、溝-5に囲まれた内においても多くが検出されており、柱穴と溝-5の有機的関連性も考えられる。

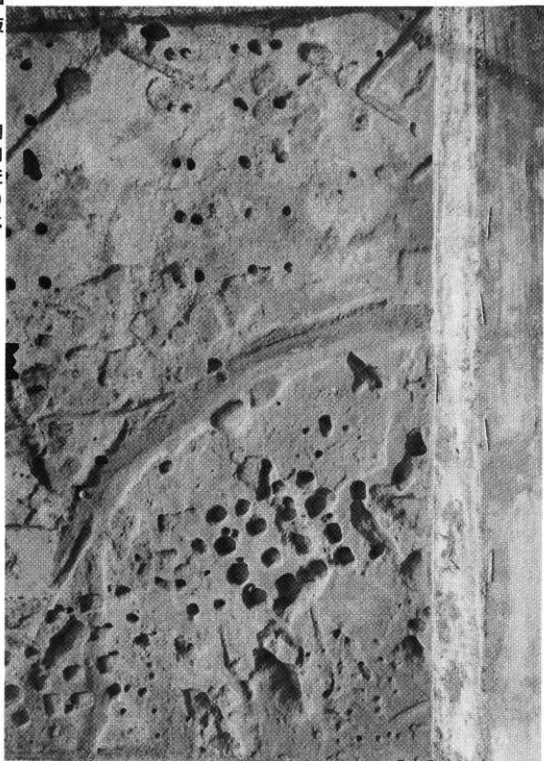
今回の発掘調査で、いままでの遺跡の様相があまり判明していなかった郡遺跡であるが、いくつかの成果を得ることができた。今後も郡遺跡様相解明の手掛かりをつかみたいと考える。

图 版

図版 1
1 期調査全景



図
版
2
1
期
調
査
の
北



図版 3
1期調査の南



図版 4
2期調査の全景



図版 5
2期調査の北



図版 6
2期調査の南





郡遺跡発掘調査概報

(株式会社孔官堂倉庫建設に伴う調査)

平成5年3月15日 印刷

平成5年3月15日 発行

編集及び発行 茨木市教育委員会